

## 野辺山観測所で過ごせたのは 幸運であり幸せでした

中井 直正(関西学院大学)

野辺山宇宙電波観測所は45m電波望遠鏡とミリ波干渉計により、日本の観測天文学を初めて世界水準にしました。観測所の運営は、所員の数が少ないということもありましたが、森本雅樹さんや海部宣男さん達の方針により、以下のような特色がありました。

### ●全員でやる

大学院生やパート職員を含めて全員参加で運営を行っていました。海部さんは押しが強く剛腕の印象がありますが、人の意見は良く聞き、人事でさえ大学院生や研究員の意見も積極的に聞いていました。小所帯の東大天文教室や東京天文台宇宙電波部の伝統もありますが、大学院生から教授まで「先生」という呼称はなく、院生でも教官を「〇〇さん」と呼ぶのが普通であり、研究者間の上下関係は少なかったです。京都大学や名古屋大学と共通する習慣です。

### ●自由があった

肩書によらず、自由にものが言える雰囲気がありました。またかつては45m鏡による共同利用観測もおおらかで、観測内容をあまり詮索することはありませんでした。私が銀河中心巨大ブラックホー

ルにつながる高速水メーザーを検出できたのはこのおかげです。あっと驚く予想外の発見は目的外のところから出てくる(セレンディピティ)場合が多いのでこのような自由は大切です。残念ながら、プロポーザル通りに観測せざるを得ないALMAのような干渉計では困難です。

### ●欧米に負けないという心意気

特に森本さんはその意識が強く、欧米が考えた計画に参加するのではなく、自分達で考え、自分達で立案推進し、欧米がやらない、できない研究を日本がするという考えでした。

個人的には、土曜日の夜に図書室のソファに腰かけて毎週の新着論文を全てチェックし、最新の情報を逃さないようにしていたことが研究力の源のひとつでした。大学に移ってからはそのような環境ではなく、私の研究力は下がってしまいました。

1982年5月頃～2004年3月まで野辺山観測所で研究人生を過ごせたのは幸運であり、幸せでした。感謝。



今は無き上部機器室での試験観測(1.4, 1.6, 5GHz)(1982年夏)。  
左から、中井直正、祖父江義明、大石雅寿、赤羽賢司。